

中川低地南部の沖積層から産出した貝形虫化石

Ostracode fossil assemblages from the latest Pleistocene-Holocene deposits in the southern part of Nakagawa Lowland, Kanto Plain

中尾 有利子 [1]; 中西 利典 [2]; 木村 克己 [3]

Yuriko Nakao[1]; Toshimichi Nakanishi[2]; Katsumi Kimura[3]

[1] 日大・文理・地球; [2] 土木研・推本; [3] 産総研・地質情報

[1] Geosystem Sci., Nihon Univ.; [2] PWRI; [3] GSJ,AIST

埼玉県東縁部には中川低地と呼ばれる南北に長い沖積低地が広がる(遠藤ほか, 1992)。関東平野に細長く発達するこうした低地の地下には、最終氷期最盛期頃までに形成された開析谷が伏在し、海進-海退の一連の層序をなす沖積層(木村ほか, 2006)で充填されている。中川低地南部においては、これまでに沖積層の形成や古環境の復元に関する研究が数多く行われてきたが(例: 遠藤・高野, 1983; 遠藤ほか, 1983, 1988a, 1988b, 1988c, 1992)、生物化石を使った古環境解析は珪藻化石、有孔虫化石、貝化石に限られ(例: 小杉, 1992; 黒澤・小杉, 1996; 中島ほか, 2006)、貝形虫化石に基づいた古環境解析の研究例はない。本研究では、中川低地南部の開析谷中軸部(埼玉県三郷市彦成地区)において産総研の都市地質研究プロジェクト(木村, 2004)により掘削された沖積層ボーリングコア(GS-MHI-1; 55.30m 長)から採取された貝形虫化石群集に基づき、ボーリング掘削地点の堆積環境の時間的変化の概要を報告する。

同コアから層相に基づいて合計 29 個の貝形虫化石分析用試料が採取された。そのうち 16 試料から貝形虫化石が産出し、合計 30 属 59 種が同定された。Q-モードクラスタ分析の結果、5 つの化石相: 化石相 I (*Bicornucythere bisanensis*, *Cytheromorpha acupunctata*, *Loxoxoncha viva* が優占); 化石相 II (*B. bisanensis*, *C. acupunctata*, *Loxoxoncha* spp. が優占し, *Nipponocythere* sp., *Spinileberis quadriaculeata*, *Pontocythere* spp. が随伴); 化石相 III (*B. bisanensis*, *L. viva*, *C. acupunctata* が優占); 化石相 IV (*C. acupunctata*, *L. sp.1*, *P. xiphoidea* が優占し *I. miurensis* が随伴); 化石相 V (*S. pulchra*, *C. acupunctata* が優占) が認識された。これらの化石相に基づき、本ボーリングコアの堆積環境は下位から順に、1) 貝形虫化石がほとんど産出しない河川あるいは汽水域、2) 外洋の影響をうけるような湾中央から湾口へかけて環境への急激な変化、3) 約 20 m かそれ以上の古水深がある湾中央から湾口にかけての環境、4) 後浜環境、5) 淡水の環境へと変化したと推定された。以上の堆積環境の変遷について、AMS 炭素 14 年代測定値を加えて検討する。